

絶対的平安とはいかなるものなの
でしょうか。「ウダーナ」(自説經)に
は次のような韻文が書かれています。
「まことに熱意をこめて思惟する聖
者に、かの万法のあきらかとなれる
とき、彼の疑惑は」とく消えさ
うた。縁起の法を知れるがゆえで
ある。」

覚りとは

悪魔の誘惑も沙門には効果がない
と知るや、終に悪魔の王は軍勢を率い
て、シッダールタ沙門に襲いかかって
きました。しかし、シッダールタは喝破
します。

「お前の第一の軍勢は欲望である。第二
は嫌惡。第三は飢渴である。そして 第
四是妄執、第五は怠惰と睡魔、第六は
恐怖、第七は疑惑、第八は虚勢と強情で
あり、第九は利欲と名譽欲と驕慢で
のは、自己自身である」とが分かりま
す。

この内容を見ると、沙門が戦っていた
た今、成す術もなく、悪魔の軍勢は消
え去り、平穀があとずれました。

それは決定的瞬間と表現されるも
のであるかもしません。しかし、その
寺報という短い紙面上で、手短にまとめ
ることは至難なことであります。が、「歎
異抄」を象徴するようなお文であります
す第三章をご紹介させていただきます。

善仁寺同朋会で、昨年(平成29年)
は歎異抄の第三章を通して学ばさせて
いただきましたテーであります「悪人
正機」の教え。浄土真宗の教えをいただ
いていく上で、とても大事なことであ
ります。およそ「善惡」の問題とは人間の
根本問題であり、この問題を抜きにして
信仰を語れば、常に祈願、神秘信仰に帰
着するのではないでしょうか。

悪人正機

あくにんしょうき

【註】
そのいわれあるににたれども、本
願他力の意趣にそむけり。そのゆ
えは自力作善のひとは、ひとえに
他力をたのもこころかけたるあい
だ、弥陀の本願にあらず。しかれ
ども、自力のこころをひるがえし
て、他力をたのみたてまつれば、
眞実報土の往生をとぐるなり。
煩惱具足のわれらは、いずれの
行にても、生死をはなること
あるべからざるをあわれみたま
いて、願をおこしたまう本意、悪
人成仏のためなれば、他力をた
のみたてまつる悪人、もつとも
往生の正因なり。よつて善人だ
にこそ往生すれ、まして悪人は
と、おおせそらうき。

一 善人なおもて往生をとぐ、いわ
んや悪人をや。しかるに世のひとつ
ねにいわく、悪人なお往生す、いか
にいわんや善人をや。この条、一旦

発行者 青山 满 発行所 東京都文京区小石川4丁目13番19号
TEL 03(3811)4803 FAX 03(3811)3295 E-mail kbkpm386@ybb.ne.jp

2018年6月26日発行

Vol.28

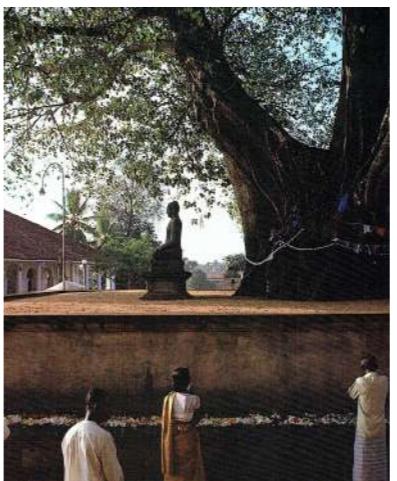


組報「縁」などを挟みました
ので、随分と久しぶりの発行
になりました。

その間に世間を賑わす出来
事がたくさんありました。

それは、問題の原因を個人
に絞り、絞り込まれた当人が
一夜にして転落していく様を
見て、溜飲を下げてている自分
です。人を裁くことに躍起に
なつてしまふ。

このことを「悪人正機」とい
うテーマで考えてみたいと
思い、好き勝手に書かせてい
ただきました。 合掌 (じょうまん)



→コロンボ郊外の寺院の様子。菩提樹の根本
鎮座する仏陀像へ祈る人々。祈りの風景は
私たちの人間の信仰の原風景である。

◇現代語訳(私訳)

善人ですら往生を遂げるのである。
ましてや悪人はもちろんのことであ
る。しかしながら、世間ではよく、悪
人ですら往生する、ましてや言うま
でもなく、善人は往生するのである
と。この言い分けは一応、その道理
は尤もなようであるが、本願他力の
お心に背くものである。何故かと
いふと、自力作善の人というのは、常に他
力をたのむ心が欠けているうちは、弥
陀の本願といえるものではない。



